シリーズ／石に命を吹き込む長岡兄弟

上蓮華の上部に瑞祥七相を浮彫りで彫刻
三樹院（神奈川県三浦市）に「仏足石」建立

愛知県岡崎市の石彫家で大仏師の長岡和慶師が制作した三樹院型「仏足石」が、このほど神奈川県三浦市の浄土宗三樹院（第十九世・今井正純住職）の敷地内に建立された。

三樹院敷地内に建立された仏足石（右）と、今井住職による開眼法要のようす。総高さ46㎝、上蓮華の直径は40.8㎝。愛知県産「花沢石」で制作された

同寺とのご縁は、「ぽっくり童十一面観音立像」「親子地蔵」（ともに平成二十九年）、「童合掌地蔵柱」「五劫思惟阿弥陀如来座像」（ともに同三十年）に次ぐ五体目で、今回は浄土宗開宗八百五十年記念として建立された。

仏足石は、釈迦の足跡を石に刻んだもので、インドでは原始仏教時代より信仰の対象とされ、古いものは紀元前四世紀まで遡る。日本では奈良・薬師寺にある仏足石（七五三〔天平勝宝五〕年）が有名で最古のものとされる。

足裏には通常「瑞祥七相（十一霊相または瑞祥文様）」が刻まれるが、時代や地域によって文様や彫り方などが異なる。そのため和慶師が集めた資料に基づいて、同寺オリジナルとなる七相「月王相（＝親指の火焔模様）」「（卍）花文相」「金剛杵相」「双魚相」「宝瓶相」「千輻輪相（輪宝）」「梵王頂相（五つの山を含む）」を描いて提案したところ、検討の上、採用された。また今井住職の希望により、雨水が溜まらないように上蓮華の上に浮彫り（凸）で文様を彫り出し、反花付きの六角型台座に据える意匠となった。

石材は愛知県産「花沢石」を使用。上蓮華は八重の筋蓮華とし、一番下の大花弁の間に小花弁の先端を少し覗かせる。六角台座の角隅はノミ切りとし、平面部分の本磨きは手作業で仕上げた。字彫りは岡崎石工団地内の㈲三矢刻字店、据え付けは横須賀市の㈲鈴木石材店（鈴木俊充社長）が行なった。

開眼法要は去る二月二十日、施主及び関係者らが見守るなか、今井住職を導師として厳かに営まれた。

◎長岡和慶
愛知県岡崎市東牧内町字堤外60-1
TEL0564-32-2335
E-mail：mitie33n11@yahoo.co.jp